

## チューリヒ歌劇場 《アラベラ》新演出

イタリア国境からじわじわと新型コロナウイルスが広がりはじめた3月1日、R・シュトラウス《アラベラ》はかろうじて初日を迎えた。4日の所見目も、題名役のユリア・クライターとエレメール伯爵役のポール・クリエウイチは病欠で、アストリッド・ケッスラーとティーン・パウワが代役を務めた。1000人以上が集まるイヴェントをスイス連邦政府が禁止したため、チケット販売数を900人に制限したうえ、定期会員枠にも空席が目立った。

ロバート・カーセンの演出は、彼が好む赤と黒の舞台装置に現代的な解釈で、最後まで緊迫感を保っていた。時代設定を第二次世界大戦中に移し、男性バレエがナチスの暴力性を演劇的に昇華させ好感を与えたが、ハッピーエンドで終わらない幕切れはコロナ騒動に痛めつけられている現状にはキツかった。

アラベラ役のケッスラーだが、11月末に新国立歌劇場(こうもり)のロザリन्दで日本デビューする。初めは声が不安定で響かなかつたが、幕が進むにつれて落ちつき、実力を見せた。ズデンカ役のヴァレンティーナ・ファルカスは第一声から光る歌唱を聴かせた。マンドリカを演じたヨゼフ・ワグナーは異途者だが、声が伸びず落ち着かない様子が続くうちに声が割れ、歌い続けるのは無理かと思われた。しかし奇跡的に持ち直し、最後はいちばん喝采を浴びていた。ダニエル・ペーレは安定感が大器を感じさせるのだが、マッテオ役の満たされぬ人格描写のせいか、力んだままでリラックスして聴けないうちに終わって

しまった。ファビオ・ルイジは一貫して存在感が出ず、指揮者不在のような印象を与えた。オーケストラを美しく響かせている部分もあるのだが、フレーズを歌わせることとはなく、R・シュトラウスの音楽をどう表現したいのかわからない。しかし全体としては印象深い作品に仕上がっており、アンド



チューリヒ歌劇場の《アラベラ》は、歌劇場の閉鎖ギリギリで上演できた ©Toni Suter

ンセルになったが、オペラ公演を死守する意向だったホモキ総裁は、隣国のウィーン国立歌劇場やバイエルン州立歌劇場が閉鎖を決めてもその態度を変えなかった。しかし、3月12日、ブッチーニ《ボエーム》の第2回再演日、4日前にロドルフオ役デビューを飾ったファン・ディエゴ・フロレスが開演数時間前に病気でキャンセル、「残された時間で代役が見つからない」という理由で公演自体が中止になった。その翌日の3月13日、連邦政府が100人以上のイヴェントを禁止したため、そのま

ま4月いっぱい閉鎖を余儀なくされている。

### 開演数時間前にキャンセルとなったチューリヒ・トーンハレ管

チューリヒ歌劇場の公演が突然キャンセルされた前日の3月11日は、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団が、パウオ・ヤルヴィ新音楽監督のもとで進めているチャイコフスキー・ツィルクスの第4プログラム初日公演の予定だったが、同じく開演数時間前にキャンセルとなった。理由はチューリヒ歌劇場よりも切迫したもので、エキストラとしてリハールに参加していた奏者が病気になる、コロナ感染の疑いがあるということだ。検査を受けたため、その結果が出るまでの応急処置であった。関係者は検査結果の陰性を祈ったが、翌日に陽性反応が確認されたため、オーケストラは

4月5日までのすべての公演をキャンセルし、楽団員全員または一部が隔離施設に送られる可能性が危惧された。しかし隔離施設の空きが限られていることもあり、乗り番だった団員は自宅待機を要請された。それにより、今シーズンの同ツィクルスはちよと半ばで中断された。

### 急遽テレビ・カメラ5台を搬入 無観客で演奏したスイス・ロマンダ管

スイスでいちばんうまく休止状態に移行できたのは、ジュネーヴのスイス・ロマンダ管弦楽団だろう。トーンハレ管と同じく3月11日にR・シュトラウスと藤倉大作品の演奏会が予定されていたが、当日に同じくジュネーヴにある世界保健機構(WHO)がパンデミック宣言を出したため、急遽テレビ・カメラ5台を搬入し、聴衆なしのラジオ放送の予定に加えて映像もネット放映した(Tisch/culture)。当楽団のゼネラルマネジャー、ステイーヴ・ロジエがちょうど東日本大震災から9年目という事実にも触れ、モンテカルロ交響楽団と読売日本交響楽団、スイス・ロマンダ管が共同で藤倉に委嘱した「ピアノ協奏曲第3番(インパルス)」と、そのソリストを務めた小菅優の祖国、日本を紹介した。客席が空のヴィクトリアホールを(ドン・ファン)で温めたオーケストラは、集中力を研ぎ澄ませた小菅と共に、藤倉作品をみずみずしく聴かせた。その後、R・シュトラウスに戻り、「オーボエ協奏曲」を最大スケール感で聴かせたアレクセイ・オクリンチョク、(ティル・オイゲン)シュビールの愉快な「オラ」を鮮やかに表現したジョナサン・ノットら、全員に直接拍手を贈れないのが残念だが、家にいながら聴ける幸せを噛み締めた。